

樋口季一郎とオトポール事件

(猶太難民救出に最初の道を開いた男)

樋口季一郎 (明治21年10月15日～昭和45年10月15日病死)

- 兵庫県三原郡南淡町出身 奥浜久八の長男として誕生
- 大阪陸軍地方幼年学校から陸軍士官学校(21期) 明治42年5月卒。陸士の同期生に石原莞爾、安江仙弘(ノリヒロ)がいて、共にユダヤ保護に直接・間接に貢献することになる。
- 明治40年 主計将校の樋口勇次の養子に入籍する。
- 大正4年～7年 陸軍大学でロシア語習得。
- 大正8年 陸軍大尉でシベリア出兵。ウラジオ特務機関員からハバロフスク特務機関長、同14年 参謀本部勤務。



樋口季一郎

ユダヤに関心を持ったのは大尉時代からで、樋口が何故 親猶太になったかである。それは南ロシア・コーカサスを旅行中、ユダヤの老主人が日本人たるを知るや、「私は日本天皇こそ、我らの待望するメシアではないかと思う。何故なら、日本人ほど人種的偏見のない民族はなく、日本天皇はまたその国内に於いて、階級的に何らの偏見を持たぬと聴いているから」というのであった。それは樋口にとっては一例であって、色々な尊敬される体験をするが、その原因は上記と同じ理由からだった。樋口は明言している

「彼らの、私を尊敬する理由は、日本天皇が示す国の姿（八紘一宇の思想）であったのを知り、少なくとも、日本国乃至日本人として**排ユダヤ主義を奉ずる何らの理由なきことを信ずるものである**」・・・と。

注) 八紘一宇

天下・全世界を一つの家にする。『日本書紀』の「八紘(あめのした)を掩(おお)ひて宇(いえ)にせむ」を、全世界を一つの家のようにすると解釈したもの。

この体験は大正14年5月にポーランド公使館附武官として、陸軍少佐として赴任した折のことであり、この樋口が**我が国で最初のユダヤ人救出と保護の扉を開くことになる**。天皇こそ「我らの待望するメシアではないかと思う」とユダヤ老人の期待に答えた彼の行動こそが安江大佐、犬塚大佐そして杉原領事代理、根井三郎、小辻節三の行動を可能にし、**生命を「つなぐ」救出劇へと進んで行く**。

その他樋口は昭和11年ジュネーブでのユダヤ人の生存権を確保する為の、全世界のユダヤ人の共同機関結成を目的とした「第一回ユダヤ人大会」、同12年の「第一回極東ユダヤ人大会」ではハルピン特務機関長（少将）として、安江大佐等と共に出席、彼のユダヤ難民に理解を示した大会祝辞に全員の破れんばかりの拍手を受ける。涙する者も居た。

昭和13年3月8日ソ連領オトポールにナチスのユダヤ人狩りから逃れてきた約2万人の難民が吹雪の中で立往生しているの一報が入る。又ユダヤ側からカウフマン博士が樋口に救出を哀願。若宮参事官に外交努力の要請と満鉄総裁 松岡洋右に救援列車の出動要請の電話をする。

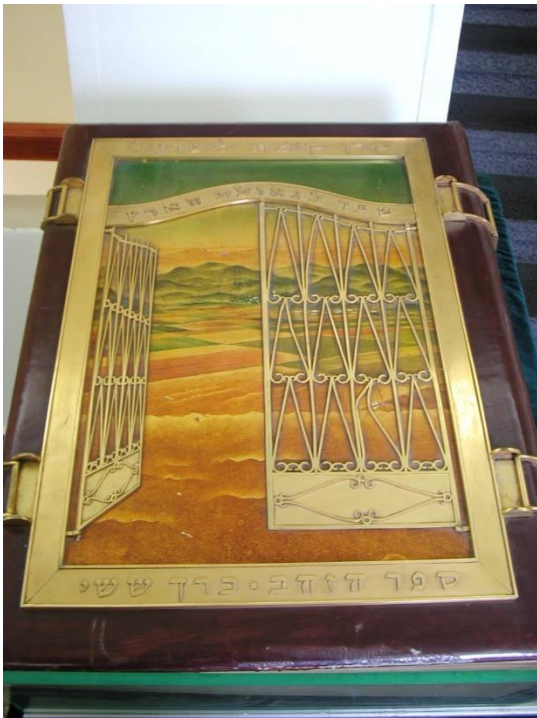
ソ連と国境を接したオトポールはユダヤ人狩りから逃れたユダヤ人がフランクフルトからシベリヤ鉄道経由でようやくたどり着いていた。彼等は上海へ行く為の満州国政府に国内通過の救いを求めたが、満州国は関東軍に遠慮してこれを拒否した（当時は、ドイツと日本は同盟していた故に）。樋口少将は八紘一宇の精神から**関東軍には認可を受けず、独断で外交的処理**を次々とやってのけ、12両編成の列車13本をオトポールに送り、満州通過を助けた。**これぞユダヤ2万人を救った難民脱出の樋口ルートであった**。

樋口の独断行動は、軍部としては都合が悪い為、軍事機密として処理され、外部には終戦後まで洩れなかった。しかしこれは日本陸軍が行った**最大の善行**であった故に処罰を受ける事なく、昭和17年8月には北部司令官に親補、昭和18年2月北方軍司令官、昭和19年3月には第5方面軍司令官となり終戦を迎えた。

英米はユダヤ人の入国を制限しており、結果的にガス室に送り返されるという事件も起きている。又ドイツからは抗議がなされ、時の関東軍司令部参謀長が彼に釈明を求めた。彼はドイツのユダヤ政策は人道上の敵とも言うべき国策であり協力はできない。又

日本はドイツの属国ではなく満州国も同様であり、貴国の政策に従う理由はない・・・との意見に東条参謀も賛成し、ドイツにその旨通告した。

オトポール事件で評価されるべきは、ユダヤ難民を救出した「善意・善行」であり、それを決意せめた動機である。『ユダヤ老人の言葉＝八紘一字の思想』を奉じた樋口少将の愛民愛国の心である。



イスラエル建国の功労者の氏名が刻み込まれた、エルサレムにある「ゴールドンブック」。モーゼ、メンデルスゾーン、アインシュタインなどの傑出したユダヤの偉人達にまじって、上から4番目に「偉大なる人道主義者、ゼネラル・樋口」の名が刻まれている。

平成26年10月13日
志雲会代表 有馬正能